

真剣でボギーウツズに
恋しなさい！（仮）

シャチョー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神奈川県川崎市、一人の少年が生まれもった体質から不気味がられて親不孝通りに捨てられてしまう。

少年は子供特有の無邪気さゆえに、親に捨てられたショックゆえに、容易に人道を外れた行為にひきこまれ、生きのびる。

そしてある日、少年は川神院元師範代の中年男と出会う……

第1話

目次

1

第1話

釈迦堂 刑部、この灰色シャツに黒いズボンで身を包んだいかつい中年男はもともと関東三山のひとつであり

武術の鍛錬場所、総本山として世界でも有名な「川神院」で師範代という地位にまで上り詰めた強者であった

が、しかし、生来の暴力的な性格と

純粹に戦闘のみを楽しみ、強さを追い求める飢えた野獣のごとき

精神に問題があるとされ、数日前川神院の頭首、

川神鉄心よりついに破門が言い渡されてしまった。

「あくあ、とうとう追い出されちまったか、まああんな堅苦しいところを

出れてせいせいしてるがな。百代や一子のことは気になるがあの人なら大丈夫だろ。

それにしてもこれからどうしたもんかね」

行くあてもなく川神市内をフラフラと歩きまわるが、そうそううまい話が

あるわけもなくただただ時間ばかりが過ぎていく。

「しょうがねえ、仕事ができまるまでは堀の外で寝床になりそうな

ところでもさがすか。あそこなら戦う相手にもそう困らんし憂さ晴らしもできて一

石二鳥つてやつだ。

んじやま、さつそ『グ〜ッ』

……まずは昼飯クイに行くか、梅屋に」

これからの行動をとりあえず決めた釈迦堂はくると足の向きをかえて

目的地の梅屋に向かって歩いていく。

これが自分の人生にとって大きな分岐点となる少年との出会いのほんの2, 3時間前

の

話だということをこのときはまだ釈迦堂自身も知る由はなかった。

「あ、俺今400円しか持ってなかったわ、これ豚丼（とろろ付き）頼めるか・?」

親不孝通り

川神市の端つこにあり大勢の不良やはずれ者といったアンダーグラウンドの住民たちがはびこる区画。地元住民からは堀の外と呼ばれているところは

危険すぎて警察すら手が出せずにいる無法地帯、ゴミだらけで汚く狭い道には鉄くさいにおいや腐乱臭が漂っており薄い壁越しには女の嬌声が聞こえてくる。

「久しぶりだがこの獲物を狙って殺気むき出しのピリピリする感覚はたまねえな。

だが・・・身の程をわきまえろよ？狩人と獲物の立場をはき違えてんじやねえよ」

その言葉を言い終えるときにも釈迦堂の体から禍々しい気配と殺気が立ち上り耐性のない

者はその場で泡を吹いて倒れ、それなりにできる者達は自分との歴然たる力の差に気づいてそそくさとその場を去っていく。

「へっ、雑魚がいきがってんじやねえよ。

とりあえず予定通り住むところをさがすか」

そんなことを考えながら親不孝通りをまたもやぶらぶらしている

視界の端つこで高校生くらいの不良たちが親父に

いちゃもんつけ始めたのに気づく。どうやら歩いていたら肩がぶつかってしまった

ようだ。

この親不孝通りでは別段珍しい光景ではない。

(なんだ、ただのカツアゲか……っつかしなんでこんなところに

あんな冴えないおやじがきてやがるんだ?)

親不孝通りの入り口から少し進んだところでいかにもDQNな不良たちがたむろつて煙草を

吸っていると、とぼとぼとおぼつかない足取りでスーツ姿の親父が歩いてきた。

DQNたちは一瞬戸惑うも何かを思いついたのか、いやらしい笑みをうかべだす。

そのうちの一人がおもむろに立ち上がって親父のほうに向かって歩いていく。

『ドンツツ』

「あいててててて〜!」

「……………」

ぶつかつたDQNが大声を上げてその場を転がりまわるも、親父はどこか虚ろな瞳とぼんやりした表情でその状況を眺めている。

「おいおいおじちゃん、人にぶつかつていてそのたいどはないんじゃないかな？」

「兄貴は生まれつき病弱なんだよ！うわ〜こいつはひでえ、骨が複雑骨折して

粉々になつちまつてやがる、こりや慰謝料をもらわねえとなく。

治療代と兄貴の受けた精神的ダメージも込みでざつと100万円つてとこかな？

ぎやははは

「.....」

「おいおい、ぶるつちまつてんのか？返事しろやおら、ほこすぞあ、ああん!」

「そうだそうだ！さつさと100万もつて『バキイツ』ぶげらつ!」

突如、今まで何もしゃべらずにぼーつとしていた親父が詰め寄っていたDQNのほほに

拳を打ち込む。いきなりすぎたのかなんの構えもできずにそれを受けたDQNは崩れ落ちて

動かなくなる。

どうやら一撃で気を失ってしまったようだ。

「シヨウちゃん?! てつてつてめえよくもツ、ただじやすまさねえぞ！おいおまえら、やつちまえー!」

「「「おうつつ!!」」」

男たちの殴り合いがあつた現場にはズタボロになつて倒れ伏す不良たちと始まる前と同じぼんやりした顔のまま佇んでいる。

親父がひとり。何の変哲もないただの親父が

あれだけ激しく動いたにもかかわらず

息も切らさずに何食わぬ感で立っている光景はどこか

不気味な印象を周りの人間に与えた。

親父は小さくため息をつくと路地裏へと入つていく。

(ほう……?あの親父、ただの冴えないサラリーマンにみえたがなかなかどうして。

あの殴つた時や不良を相手にしてる動きからするとかなりできるな。

俺が気付かないくらいにうまくかくしてやがったか、

気もそれなりにあるようだしこいつはしよっぱなから結構楽しめそうだぜ。)

〈路地裏〉

「おっさん！結構強いみたいじゃねえか。どうだ、突然なんだがいつちよ俺と勝負しねえか？」

「……………断る」

「おいおいつれないこというなよ、おっさん。あんたがそんな調子だと、つい手がすべっちゃまうだろおおお!!」
ぶおんっ

「へえ、これをおわすなんてやっぱり見込み通り相当強いんだな。

これは楽しくなってきたぜええ!!」

初めのうちは問題なくかわしていた親父も、

徐々に勢いを増していく釈迦堂の攻撃をかわし切れず、

反撃も許されなまま防御を余儀なくされ

その身を削られていく。

(こいつどうにもおかしいな、

実際に戦ってみるまでわからなかつたがどうして体に二つも気があるんだ？

しかも片方は今にも死にそうな、もう一方は……抑えてやがるな？

上等だ、どういう仕組みかは知らんが俺もなめられたもんだッ！」

「おらあつこいつはどうだ！川神流鯨打ちッッ！」

釈迦堂の狙い澄ました一撃が親父の鳩尾に深く、鋭く食い込む。

「ガッツッ!」

「ハハハ、思ってた以上に綺麗にぶちこめたな。

どうした？そのてい……ど……?」

戦いが始まってから終始楽しそうにしていた釈迦堂が

不意に体を止めてしまう。戦闘中に足を止めてしまうのは自殺行為なのだが

この時に限っては仕方のないことだともいえる。

先ほど自分が拳を叩き込んだ親父の背中側が異常に盛り上がり、明らかに人体から出
ては不味い音を出しながら苦しそうに身もだえしだしたのだ。

『バキボキッブチブチブチゴリユッポキビキッ』

そして音があらかたなり終わってから、倒れこんだ親父の背中にある膨らんだ所から
ズルズルッという音を立てながら何かが出てくる。あまりにも現実離れをした凄惨
な光景にさすがの釈迦堂も思わず顔を顰める。少年が抜け出た後にはまるで全身の骨
だけを抜き取られてしまったような親父の皮だけがブヨブヨびくびくとしていたのだ。
しかも驚くべきことにそいつはまだ生きている《……》。

「ガッツ、ギイツツ、ウアアア……ッ……」

「……はっ!? あぶねえ、驚きのあまり我を見失ってたぜ……」

ククツ、それにしても一体全体どういうことだそりゃあ、おまえさんは腹の中に寄生して成長するエイリアンか何かか? なあ坊主」

ぴちやつぴちやつゲホゲホツ、ふう

声をかけられた少年は自分の体についている体液を払って落としながら急き込んだ後息を整えている。

「ぐっ、うう……こんな初めてだよ、まさか『宿』から叩き出されちゃうなんて。おじさんこそ何もんなの?」

「うげえ。つてこら、俺はまだおじさんじゃねえ、お兄さんだ。川神院 “元” 師範代の釈迦堂刑部だ。坊主、おまえは?」

「僕の名前? ……ボギー、ボギーウッドっていうんだ。」

「あー、おまえ金髪だし見るからに外国人っぽいもんな。そうかボギーか、覚えといてやるぜ。さてと、続きだ続きだ! 戦闘再開ツと!」

がしっ

「おわつと! いきなり何すんのさ!? 危ないじゃん!」

「そんなこと言いながらあつさり受け止めてんじやねえか、それもさつきまでより

気を込めてるのに。やっぱさつきまでのブラフか、抑えてやがったな？」

それにどうやらまだ隠し玉もあるようだしとても百代や一子と同一年には：

いや、百代はそうでもないか。とにかくだ、手段はしらんがおまえさんの生きた人間に入つて戦うつてのは俺も今まで生きてきて初めて見たぞ？俄然、おまえさんの隠し玉も気になつてくるつてもんだよ、ナアツ!!」

「うわわッ!? 大体百代つて誰さ…：ていうかおじさんはこのくつたりしちやつた親父のこ
ととか気にならないの？」

「ん？ そんなもんなんで俺が気にしなきゃならねえんだ、たしかにこんなのは初めてだ
がやつた理由ならわからんでもない。大方他人の命なんぞないがしろに生きてられな
かつたんだろ？ ここは弱者相手に容赦する奴なんかほとんどのいないしな。」

それにおまえ…：…親に見捨てられた捨て子《…：》だろ？」

と、言い放つた瞬間先ほどまで無表情に近かつた少年の顔が悲痛に歪み、体から湯水
が噴き出すかのごとく勢いよく気が放出されだす。

「!? ア、ア、ア、アッアアアアアアアアッアア、!!!」

(こいつはまさしく想像以上だな、これは鍛えれば百代にも届くか？ そうすれば俺の飢

えだって…

本当に面白い坊主だ、これが終わったたら本格的に育てるのも悪かねえ。ははっ俺がこんなこと思うようになるなんて、

俺が破門されたのはこいつと会うためって言ってもいいくらいまさしく運命的だ。

でもま、今は……)

「この戦いを楽しもうぜ糞ガキいー!!」

「があーっつっつ!!」

おまけ

オヤジ(これからいったいどうすれば…ていうか俺の近くで戦わないでくれ。そして病院へry)